

# 惜しみなく愛は逸れる

——失われた「愛の極限」を求めるための手がかりとしての  
ラカンの「Lシェーマ」活用術<sup>1</sup>

清田友則

男女の調和というものが問題をはらんでいないとすれば、精神  
分析などありえないでしょう（ラカン）<sup>2</sup>

本稿では、精神分析家ジャック・ラカンの「Lシェーマ」の謎を紐解く  
ことを目的とするが、紐解けば紐解くほどかえって謎が深まるのがLシェ  
ーマをはじめとするラカンの諸図式の特徴でもあり、スパイラルを言語化  
することでかえって失われる論理の“無機質性”に活字でどこまで迫れる  
かが本稿に与えられた（臨床とも相通じる）試練でもある。

## I

以前、筆者の勤務校の英語入試問題に「『私のところが好き?』と彼女か  
ら訊かれたら男はどう答えるべきか?」という趣旨の大学入試問題にして  
はユニークな問いが出題されたことがあった<sup>3</sup>。正答率に逆ジェンダー・  
バイアスがかかっていたかどうか（問う側の女子のほうが答える側の男子  
より有利ではないか?等）は定かではないが、ただひとつ言えるのは、こ  
の問いを額面通り受け取り、罨を読み取れない受験生がもしいたとしたら  
——「教室は、例えていえば、地雷原」という学校「あるある」川柳にも  
あるように——その学生はそもそも大学を受ける前に教室から淘汰されて  
いたであろうことである。そして、教室の随所に散りばめられた地雷のな

かでも最も強烈な破壊力を持つのが異性関係にまつわる問題であることは申すまでもない。だからもし受験生が上記の受験問題らしからぬ問いに度肝を抜かれたとすれば、それは「出題者の大人たちよりもはるかに事情を把握した自分たちにむかってこのような問題を出すとはどういうつもりだ？」といった戸惑いの感情に拠るものであろう。

では、なぜ額面通り問いに答えてはならないのか？ これは経験知があればすぐに分かることだが、『『どこ』というからには…』と具体的に答えようとする、容姿であれ（「瞳」「唇」「背丈」）、内面であれ（「やさしさ」「内気そうなところ」「おちゃめ」）、彼女はそれ“だけ”で満足することはできず、「他には？」と何度も問い返してくることであろうことである。では、なぜ彼女は満たされないのか？ それはこれらの回答が、すべて彼女の“部分”にまつわることだからである。部分であるかぎり、そこから抜け落ちた他のものが潜在的に浮かび上がり、彼女の全体像を指し示すには至らない。「だったら最初から『私のこと、好き？』と彼女の全体について訊けばいいじゃないか？」と言うかもしれないが、しかしそうすると、「Do you love me?」「Yes, I do.」とまったく味気ない会話になってしまう。本人たちもそれがじゅうぶん分かっているから、あえて「どこか」に的を絞ることで無味乾燥なやり取りを回避しようとするわけだが、その結果、無限ループ（といっても中身は有限だが）に陥ってしまうとなると、彼氏はいったいどのようにしてこの難局を切り抜ければよいのか？

ちなみに答えは——著者が精神分析の臨床家であることを心に留めておこう——“部分”でも“全体”でもなく、どちらの誘惑もかわしつつ、それでいてはぐらかした印象を持たせない言葉で難を脱することであり、その一例としてあげる言葉が“Big”である。で、はたして彼女は満足してくれるであろうか？ はぐらかされ感が払拭されたとは言いがたいが、当座凌ぎできる程度には功を奏したのではあるまいか。ちなみに、我々はここで恋愛偏差値を高めるための議論をしているわけではない。議論の目的はあくまで精神分析的視座に立った問いの意味であり、答えは回答者（分析者）ではなく問う者（被分析者）の側に内在している。「君は『I love you, too!』だけでは満足せず、さらにそれを『モノ』（部分）で示せと要求するが、本当に君は“それ”を望んでいるのだろうか？」という、彼女自身

の欲望の——フロイトの用語を使えば——“目標”や“対象”<sup>4</sup>のありようであり、これらの所在をすでに認識しているのであれば、「他には？」などと持って回った言い方で彼氏を困らせたりせずに、事前に答えを教えてあげれば済む話である。なのに、なぜ彼女はあえて話をそらそうとするのか？ この謎に迫るべくフロイトが立てた概念が、「目標」と「対象」とこれらの微妙な差異についてである。

フロイトの数ある独自概念のなかでも最も紛らわしいものの一つが目標と対象である。たとえば、「性欲の処理」が目的の場合、狭義に「抜く」ことができれば目標は達成されるはずだが、一方でひとは「オカズ」（対象）なしに抜くことはできない。さらに、対象といっても、生身の人間の場合もあれば、その様々な代理表象（セクシー女優、美少女フィギュア、フェティッシュ、「二次創作」で加工された同性愛キャラ、等）の場合もある。生物学的（生殖的）観点からいえば、当然目標のほうが優先され、対象はあくまでそのための手段にすぎないが、フロイトに言わせれば、いや、わざわざ言われなくても、ひとは生殖をオカズに性欲を喚起することはできないどころか、下手すると生殖目標から対象が“逸脱”した“倒錯”状態のほうがかえって欲望は喚起される。要は、「ふたりエッチ」であれ「ひとりエッチ」であれ、対象が目的（生殖）を持たない点では同じ行為ということなのだが、ただ、これはなにも人間に限ったことではなく、動物の後尾においても、目的と対象は同一のものではなく、性本能の充足と種の保存が一致するのはあくまで結果論にすぎない。では、動物と人間の違いは何か？ これは性行為の（悦びの）中身を見ればたちどころに分かることだが、動物の後尾がおしなべて単調なのにはたいし、ひとのセックスは複雑かつ多様である。目標充足はできる限り先延ばしされることが好ましいし、「飽き（させ）ない”セックスが「よいセックス」、「きれいになるセックス」とされる。動物の後尾を単調と呼んでも「マンネリ」とは呼ばないのは、人間のセックスが「単調」の対義語である「複雑」では言い尽くせない余剰性、意外性——一言でいえば倒錯性——をその本質に孕んでいるからであろう。

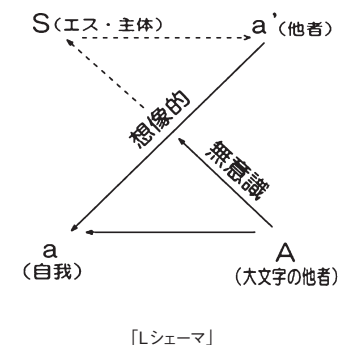
冒頭の問題ともここでつながる。「私のどこが好き？」と訊くとき、彼女は明らかに予期せぬ答えを求めている。たとえば容姿についてだと、こ

れまでひとから度々褒められてきた箇所、たとえば「つぶらな瞳」と答えても興ざめするだけだろう。それを言うくらいなら、むしろ自信のない箇所を指摘するほうがたとえ見え透いたお世辞だとしても、より効果は大きいだろう。要は、驚きと戸惑いの対象としての「君の“ここ”が好き」こそ、彼女の“全体”に欠けているものなのだ。そもそも「Do you love me?」に対する答えは「Yes, I do.」か「No, I don't.」の二択しかなく、答えが前者であることは分かりきったことだ。だから必然的に部分的回答に向かうのだが、解決に向けて一步近づくのかというところともかぎらず、むしろ迷走が始まるのはそこからである。そもそも彼女は部分の集積(a + b + c...)を通じて全体像(=X)を掌握したいのか？ それとも一つしかない真の部分を探り当ててほしいのか？ ふたたびマンネリ化しないセックスの喩えていくと、後者の場合、「そこ」が最大の喜びを与える場所として確定されると、そこだけ一点特化すればよいことになり、結果的に反復を通じたマンネリ化は避けられない。多様性を重んじる前者はその点では大丈夫だが、代わりに別の問題が発生する。常に部分の総体や他の部分との比較兼ね合いでしか測れない部分は、しょせん“全体の一部”に過ぎず、特異で代替不可能な“そこ”としての密度と強度に欠ける。そもそも彼女が貪欲に「他には？」と繰り返すのは、あらかじめ想定され得るいかなる“それ”とも合致せぬ、それでいて“それ”としか言いようのない得体の知れない何かを期待したからであろう。

ということで、そろそろ本題のラカンの「Lシェーマ」に入るが、ここまで論じてきたことをとりあえず一言でまとめると、「なぜ“全体”よりも“部分”なのか？」となる。しかしこれは明らかに論理的矛盾であり、「日本」よりも“東京”と言うようなものである。日本から独立して別の国になれば矛盾は解消するが、誰もそれを望んでいるわけではないだろう。むしろここで問題になるのは、優先順位としての「全体より部分(なのか?)」という問題であり、これを時間軸の側面から図式化したのがほかならぬ「Lシェーマ」である。そして、それを通じて見えてくるのが、優先順位が必ずしも自明ではなく、むしろ反対に「“全体”が先か、“部分”が先か？」という「ニワトリと卵」のジレンマに否応なく陥ってしまうことである。

## II

さっそく「Lシェーマ」に即して時間の流れを順に見ていこう——。



表記のアルファベットはフランス語の頭文字で、これらを英語と日本語に直すと「S」=「Subject」(主体)、「a」=「other」(「(小文字の) 他者」)、「A」=「Other」(「(大文字の) 他者」)となり、アポストロフィ(正確にはプライム)のついたもう一つの「a'」は「a」との類似物、関連物を指す。ここでまず問題となるのは、ニワトリとしての「S」と卵としての「a」の統語論的關係である。ラカン独自の概念のなかでもとりわけ異彩を放つものに「objet petit a」というのがあり、英語圏でもそのままフランス語で訳されるが、ラカンにとって他者とは(大小の別なく)常に対象であり、文法的には目的語となる——

S (主語) + V (動詞) + O (目的語) (例: I love you.)

語順的にはSがOより先だが、ピリオドを打って初めて文が完結するという観点からいえば、最後の語の確定をもって意味の発信が始まると捉えることもできる。ただ話者にしろ聴き手にしろ、主語が起点とならないことには何も始まらないのが率直な気持ちだろうし、「誰」「何」がまず措定されないことには読み取り作業もままならないだろう。とはいえ主語は起点としての機能をそもそも果たしているのだろうか？ 上の例文でいくと、

「I love you.」を「私」が仮に清田だとして、清田のことを何も知らないひとたちはいざしらず、清田と関わりのあるひとたち（「君」も含む）にとっては、清田に関するこれまでの情報の蓄積の延長上に「I love you.」を位置づけたうえで意味を読み取るのが普通であって、蓄積の最後に位置する点では、センテンスもろとも目的語である。そしてその観点から見ると、蓄積過程の始原に位置する「I」は誰しもが潜在的候補になりえる「代名詞」そのものとしての「I」であって、そんな空虚な「わたし」に主語としての機能もへったくれもない。

ところで、ラカンが物事をシェーマ化する意図は、余計な夾雑物をすべて取り除くことで事物の核心を可視化、位相化することであり、Lシェーマも例外ではない。英語やフランス語の「主体」(「subject」「sujet」)と違い、日本語では「主語」と「主体」が場合に依りて使い分けられたりするが、これはある意味とても便利である。というのも、主体はひとに限られるが、主語はモノにも適用可能だからである。では、そうした使い分けができないフランス語でラカンがどうしたかという、それは得意の語呂合わせであり、「sujet」の頭文字「S」の同音異義語（しかもドイツ語）の「Es」(エス＝「それ」)をかけ合わせることで、主体の中の非主体性を仄めかす。ここでラカンが言わんとするのは、たんに文の主語の位置に身を置くだけで主体になれるのだとしたら、その資格は人間以外のものにも与えられるはずである。なのに、どうして極端な違いが生じるのか？ここで出てくるのがほかならぬ目的語としての対象である。位置関係からくる主体の優位性なるものは、対象との位置関係に全面的に依存している。それこそ「私はわたし」のように主体と対象が（少なくとも話者の意図としては）一致する文では、二つが等価であるぶん、語順による優位性は確保されない。しかも興味深いのは（そして皮肉なのは）、「私はわたし」のような極端に等価な文においてはいかなる「私」の意味内容も示されず、むしろこの中身のない「私」に居直りの印象（「私はあなたとは違う」）が言外に醸し出され、居直り自体がひとつの意味をなしてしまうことである。そして意味が成立するということは、どこかに対象（目的語）があることになるが、それが見当たらないのだ。否定形（「私は…ではない」）ですら対象をとまなうのに、それすらないのだ。

これをLシェーマと関連付けると、「私はわたし」の「私」と「わたし」は、それぞれ「a」「a'」に置き換えられる。ラカンはこれらを「等価」として位置づけ、その際、マルクスの価値形態論を重要な参照項として引き合いに出す<sup>5</sup>。ちなみにマルクスのいう等価性とは100円硬貨＝100円硬貨といったトートロジーではなく、質量ともに異なる物同士が取り結ぶ等価関係である（例：100円のコーヒー＝100杯の緑茶）。「a」と「a'」という一見紛らわしいが、まったく別物である点では同じである。ラカンの最も有名な概念の一つに「鏡像段階」があるが、「a」と「a'」の関係がまさにそれにあたる。ついでに蛇足すると、ドゥルーズ＝ガタリの「器官なき身体」という概念を逆さまにしたスラヴォイ・ジジエクの「身体なき器官」<sup>6</sup>という題名の書があるが、もともと人間は「全体なき部分」——自分のものかどうかとも定かではない部位、四肢がバラバラの状態——として生まれ、生後6ヶ月から18ヶ月の間になってようやく自分の身体像を掴めるようになる、というのが鏡像段階の骨子である。では、「全体なき部分」は鏡像段階の到来とともに消滅するのか？というところではなく、抑圧されながらも痕跡は残る。「私のどこが好き？」につなげると、彼女が求めているのは彼女という全体の特定可能な「一部」としてではなく、むしろ、「他には？」の「他」、一部のようにいて一部でない、名指しした途端に全体の数多ある一部に降格してしまう正体不明の“X”として残るのであり、そしてそれが他ならぬ「objet petit a」である。

### III

謎の対象としてのobjet petit aは、マルクスの価値形態論においても同様の位置付けがなされている。そもそもなぜコーヒーと緑茶というまったく別の飲み物が同じ値段というだけで——しかもなぜ同じ値段なのかという疑問は不問にされる——交換可能な対象となるのか？ たんに物々交換だからというのがいちばん簡単な説明だが（コーヒーの所有者Aは緑茶を持たない。緑茶の所有者Bはコーヒーを持たない。そこで交換することで互いの欲求を満す）、もしそうであれば100円硬貨は必要ないし、貨幣を使うことのメリット、たとえばAが自分のコーヒー1缶を相手の緑茶2

本と交換したい時にどうすればよいか?といった問いには答えられない。たしかに初めての交換の場合、相手の持ち物がどれだけの価値を持つのが不明だから、試しに適当な思いつき価格で交換してみるかもしれないが、二回目からはそうはいかない。たとえば緑茶のほうが安く簡単に作れることや、Aよりも高く買ってくれるひとがいることに気づけば、緑茶の価格が100円であらねばならない縛りから解放され、より自分の利益に適した取引を考えるようになれる。畢竟、利益とは緑茶の中身——味、滋養、水分補給、等の“意味”ではなく、商品としての“価値”である。

中身も内容も意味もなく、それでいて価値があるもの、それがマルクスのいう貨幣、そしてラカンがいうところの対象である。マルクスにおいて、価値が価値として成立するには、等価な商品二つに加え、貨幣という第三の“商品”が必要となる。同様にラカンにおいても、Lシェーマが示すように対象の二つ（「a」「a'」）に加え、大文字の他者（「A」）という第三の対象が必要となるが、これについては後ほど詳述する。

鏡像段階に話を戻すと、Lシェーマにもあるように、鏡に映る幼児の鏡像は幼児自身というより幼児の「自我」像であり、語呂遊びをするなら、本人のおおよその全体像が掴めるような「自画像」である必要はなく、全体像の片鱗を示すもの（例えば腕の切り傷）が示されれば、それ（もしくは複数の場合「それら」）を手がかりに全体像が暗示される。明示されるのではなく暗示される全体像を“イメージ”と呼ぶことが許されるなら（Lシェーマの「a」と「a'」を結ぶ矢印の線にある「想像的」というのがこれに対応する）、イメージには二種類ある。一つは部分が暗示するイメージ——ローマン・ヤコブソン以来の記号学の伝統に従えば「換喩」（例：帆が船を示す）。もう一つは別の類似したイメージに置き換える「隠喩」としてのイメージ。これらをさらにフロイトの用語で置き換えるなら、換喩は「対象選択」、隠喩は「同一化」となるが、これについても後ほど詳述。

ここで何よりも強調しておかねばならないのは、「a」と「a'」を結ぶ線は一見すると、似たもの同士という意味で隠喩のようにも受け取られるが、実際には換喩であること。もし隠喩だとすれば、100円のコーヒー≒100円のコーヒーというトートロジーに限りなく近づいてしまう。「私のことが好き？」への回答が陥りがちな「不毛な言い換え」がそれをよく説明し

てくれる。「Do you love me?」への回答「Yes, I do.」が「正しいけど間違っている」「味気ない」「もっと具体的」といった反省から、よりビジュアルに隠喩的表現で言い換えたとしよう（例：「君は…のようだ」）。とはいえ、これが両刃の剣なのは、例えば彼女が「1000年に一度の美少女」のような某アイドルに似ていると褒め、それを素直に喜んでくれたとしても、それはこのアイドルが芸能界という別世界の人間（羨望の対象）だからであって、同じクラスの中のアイドル並みにかわいい女子（嫉妬の対象）を引き合いにだすこととはわけが違う。

もっと極端な例が彼氏の母親である。なぜこれがNGなのかわざわざ説明するまでもないだろうが、あえてLシェーマ的に説明してみると、多くの男性にとって異性のなかに母親の面影を求めることは至極自然なことであり、彼女自身、母親の立場に代われば息子に同じことを望むだろう。ただ、これはあくまで暗黙の了解事項であって、口に出した途端に崩れてしまう危うい合意である。Lシェーマにおいて母親が占める位置は、ガールフレンド（「a」）の隠喩もしくは類似物としての「a'」ではなく、「a」と「a'」の関係を背後から暖かく（？）見守る大文字の他者「A」だからである<sup>7</sup>。この大文字の他者は、神と同じく不可視で物言わぬ他者である。なぜ見えない、話さないのかというと、単純に「a」と「a'」を結ぶ線上に現れないからである。人間と神の違いについて、おそらく最も構造的な定義がここにある。すなわち、「a」と「A」は、それぞれ部分としての等価関係を取り結べないのであり、その限りにおいて「a」と「a'」のつながりが保証される。フレドリック・ジェイムソンの「消え去る媒介者」（vanishing mediator）<sup>8</sup>という言葉にも窺えるように、「A」としての母親は二人が結ばれた途端に二人のもとから消え去る運命にある。

それでも彼女の魅力の起源に彼氏の母親がいることに変わりがないのなら（それが露骨に表面化すると嫁姑問題になる）、この見えない支えのおかげで、ふたりはそれぞれの部分＝換喩によってつながる対象関係としての愛の交換を行っていることになる。だとすると、彼女と彼の母親との関係は、メラニー・クラインの区分に倣うなら、“部分対象”と“全体対象”に置き換えられ、見えない全体の中で唯一見える部分としての彼女の「それ」が愛の対象もしくは（母からの）贈り物として、彼氏に差し出される

と言えるのではなからうか。だとしたら、彼女は母親という媒介者から送られた使者（メッセンジャー）という、見方によっては母親よりも低い地位に甘んじることになる。

Lシェーマにおいて「a」は主体の「自我」であり、アポストロフィのついた「a'」は「他我」である。それゆえ、彼氏を起点「a」に据えると、彼女は彼氏の「他我」としての「わたし」を彼氏に向けて差し出すことになる。ラカンのセミナーで度々引用されるランボーの有名な“Je est un autre.”<sup>9</sup>の不定冠詞“un”は「一個の」とも「一人の」とも訳されるが、部分としての他者で、ひとかモノか定かではないという意味では「一個の」と訳すほうがより適切だろう。モノといえば、自我はしばしば玉ねぎの皮に喩えられる。皮をどれだけ剥いても一向に芯は現れず、最後まで剥いたら何も残らないというのがミソで、自我は中心（芯）にあるはずだという文字通り“egocentric”な思い込みを粉碎（脱中心化）した点で、フロイトはコペルニクス、ダーウィンと並ぶ三大偶像破壊者の一人に数え上げられる<sup>10</sup>。では、中心でなければ、どこにあるのか？ 一枚一枚の皮であると同時に、どれか一枚に特定した時点で本来の自我でなくなる——鏡像の喩えでいくと、鏡に映りながらもそこには存在しない像としての対象である。

ただ、像としての対象は一方で交換対象でもあり、鏡に映る自身の虚像と、触ることはできるが直接見ることのできない自身の実像との交換は可能である。ひとは自身の像を仲立ちを介してしか見ることができない。その仲立ちが大文字の他者であり、その結果、対象の持って生まれた（とされる）独自性、特徴、その他諸々の“中身”はすべて交換価値に還元される。ちなみにいま我々は「a」と「a'」を彼氏と彼女にそれぞれ代入させて議論しているが、彼氏の部分と彼女の部分が交換可能であるということは、彼氏の全体の中に彼女の部分がいて、逆もまた然りであるということでもあり、しかも、いわば「原全体」という全体像の起源が大文字の他者たる母親であるとするなら、彼氏も彼女も彼氏の母親の（切り離された）分身であるということもできる（ここに彼女の母親が登場する余地がないのは重要な論点だが、本稿では論じない）。

スラヴォイ・ジジェクは、ラカンによる愛の定義——「愛とは自分のも

っていないものを与えることである」に加え、「それを欲していない人に」<sup>11</sup>）と補足注釈するが、前半に関してはラカンを持ち出すまでもなく、それこそ「私のどこが好き？」という問いの行間に込められた不安に見て取ることができる。では補足部分についてはどうか？ 我々の文脈にしたがえば容易に理解できるだろう。交換行為とはもともと、Aにとって必要のない所有物を、Bにとって必要のない所有物と交換することで双方が利益を得る行為である。しかしそれだと「自分の持っているものを持っていないひとに与える」ことになってしまい、後半の補足部分と齟齬をきたしてしまう。

ところが、ここでジジェクが言わんとすることは、まさにこの齟齬こそが愛の原動力として機能するという逆説である。そもそもひとは自分の欲望をどこまで自覚しているのだろうか。そういう問いに対し、ひとはよく「胸に手をあてて考えてみる」と表現したりするが、ここでいう「胸」とは「心」のことで、心の中心にあるのが自我だとすれば、「胸に手をあてて考えてみる」ことこそ自我中心主義をビジュアルに表現した行為といえる。その際、交換主体たる自我にとって、物の価値は自我と同じく事物の中心にあり、彼女の目や鼻や足といった非中心部分にはない。では中心はどこかとなると、彼氏にとっても彼女にとっても目に見えるものがすべてであり、自我があるとされる心を覗くことはできない。そこで、埋もれた自我を掘り起こすべく、「それ」（＝玉ねぎの皮）を一枚一枚丹念に剥いていくことになるのだが、どこまで剥いても皮ばかり。しかも皮は「欲する対象ではない」。そんな努力の果てに無慈悲にも訪れるのが「そして何もなくなった」状態だとすると身も蓋もない話だが、実はこの“no-thing”こそ、彼女が無意識に求めていた“対象”だとしたらどうだろう？ こうして問いの重心は、主体の中心にあるとされた自我から、周縁にあるとされる無意識に遷移する。

#### IV

Lシェーマにおける無意識の位置は、「主体」と大文字の他者「A」を結ぶ対角線上にあり、そこで「想像的」な直線と交差する。まず注視すべき

は直線の先端の矢印の向きである。ラカンの位相学において空間と時間は統語論的に連結し、「論理的時間」として把握される。この観点から捉えると、センテンスの始まりに主体（主語）があるのではなく、むしろ始まりの前にすでに「A」が発動しているが、主体はそれに気づかない。この状態がほかならぬ無意識である。フロイトが欲望の矛先を「対象」と「目標」の二つに分けたことはすでに見てきたが、ラカンはそれとは別に欲望の「対象」と「原因」という新たな二区分を提示する。例えば、「私」が任意の対象を欲するとき、なぜその対象でなければならないのか？という問いに答えることは困難だが（仮に答えられたとしても後づけの印象が拭えない）、それは単純に欲望の原因が無意識の壁により意識化できない仕組みになっているからである。しかし、そもそもなぜ無意識は存在するのか？それは端的に人間が言葉話す生き物で、さらに「無意識が言語（象徴）のように構造化されている」からだ。注意すべきは、Lシエーマにおいて「無意識」（=象徴界）の対極に位置するのが「想像的」曲線であり、そこにも論理時間的差異が見られる。この空間的差異は同時に位相的遷移でもあり、想像的に見ることのできた母親が、象徴的にシニフィアン化した父親（ラカンのいう「父の名」）に置き換えられる。この置き換えがまさにラカンのいう「父の隠喩」のことで、いっばう置き換えられた母親は、以後「父の隠喩」のフィルターを通じて以外（=父の「もの」として以外）、姿を現さなくなる（その限りにおいて、Mother⇒Otherの語呂遊びが意味をなす）。

欲望の原因としての大文字の他者である父に重きを置いた主体のジェンダー化は、一方で象徴化がまさにその役割であるところの対象リビドーを脱性化する役割も担っている。「私のどこが好き？」と訊かれて、「おっばい」や「おしり」と答える男性はまずいないが、それは「A」を通じて無意識にそれが不適切であることを学習したからである。ならばついでに適切な答えも教えてくれてよさそうなものだが、そこが「無意識の知」のひねくれたところで、知らずに学んだ知識がある一方で、とれほど学んでも習得できない知識もあり、愛の学びは後者に属す。「私のどこが好き？」という問いに不満な答えで応答する行為自体、愛の行為であり、だからこそ「自分のもっていないもの」を「欲していない」相手に与える、いわ

ば無と無の交換が意義をなし、問いが空回りすればするほど、空虚でありながらも濃密な愛が築かれるわけである。

ここで再度、二者関係の議論に戻そう。「a」と「a'」が等価でありながら非対称な関係性を帯びるのはなぜか？たとえば彼女から「私のどこが好き？」と訊くことはあっても、逆のパターン「俺のどこが好き」と彼氏が訊かないのはどうしてか？Lシエーマで二つを結ぶ直線の先端の矢印が片方にしかないことから窺えるように、「a」と「a'」は互いの像が映し合う合わせ鏡のような関係ではない。ちなみに二人のうちのどちらが「a」でどちらが「a'」かについては、主体「S」の座をどちらが占めるかによるが、彼氏が「S」の場合、「a」が彼氏の「自我」で、「a'」が「他我」としての彼女となる。逆に彼女が「S」を占めると、「a」が彼女の「自我」、「a'」が「他我」としての彼氏となり、二人は対称的關係にある。なので、対等や公平の観点から、対称性の維持にこだわるなら、Lシエーマを二つ合わせて一つのセットとみなせば対等性、公平性は保たれることになるが、実際なかなかそううまくいかないのは、「S」の対極に父の特権化する「男根中心主義」の総元締め「A」が控えているからだ。この「A」と「S」の目に見えない共謀関係をいわば消失点とした遠近法的視覚世界が、文字通り虚構の意味としての「想像的」関係（「a」と「a'」）としてそれぞれの主体の目に映るのだが、そこではもはや対象性は存在せず、たとえばキスやセックスする時、男は目を開け、女は目を閉じるように、視線の力学がそれぞれに「見る」「見られる」の性別役割分担を課することになる。

これをジェンダー刷り込みの一語で片付けられれば簡単なのだが、啓蒙したからといって呪縛がすぐに解けるわけではないことは、臨床現場で症状の原因について納得した後も症状が治まらない多くの症例研究が立証している。それどころか、疾病利得という言葉に示されるように、刷り込みから決して解放されないという諦めを逆手にとり、ならば積極的に病気を楽しもうとする倒錯的態度すら往々にして目につく。ただ、ここで念のために補足すると、疾病利得とは無知への居直りというよりは、痛みを通じて表現=表象される「知」、すなわち、性的役割分担に由来する諸々の屈辱的效果への自覚症状がもたらす快感のことである（例：リストカットがもたらす「痛気持ちよさ」）。そして、まさにリストカットに典型のように、

ジェンダー刷り込みによる被害が女性に偏るのは周知の事実だが、これを刷り込みという原因の結果と捉えるか、それとも、疾病利得を獲得するための動機を責任転嫁するための方便としての刷り込みと捉えるかは、おそらく本人も答えられまい。そんな知の範疇を超えた事象を「ニワトリが先か、卵が先か」のロジックで誤魔化すのも一種の大人の知恵だが、患者の生死を預かる精神分析家はそんな悠長な態度をとることはできない、という切羽詰まった状況のなかで作り上げた上げた装置が、いわば作業仮説としてのLシェーマである。

さらにLシェーマは一種の弁証法でもあり、ひとは新規加入の新参者としてそこに入り、その際、入り口は男女ともに同じだが、ある時期を境に分岐し。男性がそのまま主体としての道を進むのに対し、女性は主体の道を離れ、対象として別のルートを歩む（「女性は、ある時この弁証法に対象として入らなければならない」<sup>12</sup>）。とはいえ、主体としてのスタート地点は同じであり、生まれたばかりの幼児の「寄る辺なさ」<sup>13</sup>について性差は見られない。幼児の主体としての無力性は、対象としての母親——正確には、母親の“一部”としての乳房もしくはその代替物——の全能性と相関関係にある。聖書の「はじめに言葉ありき」をもじるなら、「はじめにおっぱいありき」、といっても、「ある」時もあれば「ない」時もある、極めて不安（定）<sup>14</sup>で頼りにならない存在でもある。

こうした幼児の脆弱な環境それ自体に刷り込みとしてのジェンダー差があるのかどうかはひとにより見解が異なろうが、ただひとつ言えるのは、純粋な性差、すなわち性器の違いに由来する母親との同性もしくは異性としての関係性が幼児と母親相互に与える影響の存在である。といっても、フロイト・ラカンがいうところの男女の性器は形態上の「違い」（ペニスとヴァギナ）ではなく、ファルスを「持つ」か「持たない」かの違いである。フロイトが男女の違いについて唯一挙げた定義である「能動」「受動」の起源<sup>15</sup>もそこにある。ただしつこいようだが、誤解を招かぬよう補足すると、形状的にペニスが「凸」だから能動で、ヴァギナが「凹」だから受動という身体論的説明は、ただの後付け論に過ぎず、さらに、そもそも幼児が早い段階で性器の違いを目撃する機会があるのかも疑わしい。にもかかわらず、そこに決定的な差異が生じるのだとしたら、それは幼児

の目（あるいは口）に否応なく入ってくるもの——乳房、というより乳首——を通じてでしかないだろう——

本質的なのは乳房ではなく、乳房の先端、つまり「乳首（nipple）」なのです。乳首にファルスが置き換わり、重なるのです<sup>16</sup>。

ここで重要となるポイントは、時系列的、そして隠喩的に、ファルス（＝男根）よりも前に乳首が出現することであり、ペニスはその後（「性器期」）にやってくる。ファルスと乳首は「勃起」<sup>17</sup>という共通因子を通じて隠喩関係を構築し、かたや、もっぱら泌尿器としての無味乾燥な生理学的意味しか持たないペニスがファルスとつながるのは、後々の諸々の経験を通じた“混同”を通してである。前エディプス期（「口唇期」「肛門期」）を経てエディプス期（性器期）に至る第一性徴過程の「前」と「後」の境界に位置するのが悪名高き「男根期」だが、漢字のイメージからビビッドに伝わるとおり、ファルスとはつねに「勃った」状態としてのそれである。もちろん幼児がそんな生々しい光景を目撃するはずもなく、男児も女児も自身の性器に置き換えて連想することはない。連想するとすれば、それは「勃った」状態の乳首であり、ファルスはその隠喩として、そしてとりわけ母親が幼児のそばを離れた「不在」時に幼児の生存を脅かす「欠如」（去勢）の隠喩として、不安という漠とした形で喚起される。

「男根期」が男女の別なく訪れるのはこうした理由からである。にもかかわらず、「男根期」が——「男根」という明らかに男性を優遇する用語に窺えるように——能動・受動をめぐる性的役割分担の形成に決定的役割を果たすとすれば、それはファルスの有無というより、ファルスの元となるいわば「原対象」としての乳首の“在”と“不在”——メラニー・クラインの用語を使えば「よいおっぱい」と「悪いおっぱい」——を、それぞれファルスを持つ者（父親）と持たない者（母親）のふたりに隠喩的に配置転換させるからであり、ラカンの「乳首にファルスが置き換わり、重なる」という言葉を我々はそのように理解すべきである。

これを契機にいわば両性具有だったファルス（＝乳首）は、以後ペニスと乳房と、それぞれ男と女を象徴する部分として表象され、女児において



は、それまでの「乳首」＝「ファルス」から、「乳首」＝母親の一部として、将来自分も持ちうる身体器官として掌握される。同様に男児においても、乳首は異性としての母親の所有物として把握され、乳首の隠喩としてのファルスは父親の隠れた所有物（象徴）として無意識に認知されるが、見えないために意識化されず、男児の（勃たない）「ペニス」と同様、男性身体の単なる一器官（泌尿器）として認識される。では、肝心のファルスはどこへ消えてしまったのか？ ラカンの説明はすこぶる難解だが、それ自体としては単純明快である――

フロイトは、女性は対象の本質的欠如においてファルスをもつのであり、そのことが子供との関係に密接に結びついている、と言っています。〈中略〉女性が自分の子供に満足を見いだすのは、彼女がまさに子供の中に、ファルスへの彼女への欲求を多少とも鎮め、それを満たすものを見いだすからです<sup>18</sup>。

我々はここまで幼児の視点からファルスの問題を論じてきたが、突如ここで大人（母親）の視点に切り替わっていることに注意したい。これを、動物の中で唯一、性の空白期間（＝第一次性徴と第二次性徴との間）が存在する人間の特殊性という観点から説明すると、それはそれでなんとなく理解したような気持ちになれるが、そもそもなぜそのような空白期間を要するのか？ という疑問は残る。フロイト・ラカンの立場は一貫して「遡行」という概念――現在の大人の立場からの幼少期の歴史の書き換えであり、そのためにはある一定の空白期間が必要となる――に集約される。

話を引用に戻そう。ラカンは別のところで「我々は対象の欠如という中心的概念を欠くことはできません。欠如と言っても、それは否定的なものではなく、むしろ主体と世界との関係の原動力ですらあるものです<sup>19</sup>と述べているが、ファルスはこの「欠如」の「概念」の「原始的な表象<sup>20</sup>」である。“そこにあるはずのものが無い”かぎりにおいて浮き彫りになるものを母親は子供に投影する。Lシェーマにおいて「a'」から「a」に向かう矢印の直線が、まさにこの“無いもの”を見る、いわば片思いの視線である。その際、母親は子どもの性別をおそらく認識しているはずである。

識別は「同一化」と「対象選択」の二択でおこなわれる。同一化はもちろん同性としての娘にたいして、対象選択はファルスを「持っている“はず”の」息子にたいして行われる。しかしなぜ母親は息子がファルスを持っていると信じるのか？ 理由は単純である。「a」と「a'」の双数的関係において、片方が持っていないものは、もう片方が持っているとされ、そのために交換欲求としての矢印の直線が引かれるからである。

ただ、ここでひとつ疑問が生じる。上に論じてきたように「a」と「a'」の関係は等価でありながら、“質”（マルクスの「使用価値」、ラカンの「意味」）の異なるもの同士の交換関係（例：コーヒーと緑茶）であり、女と女を入れ替えるというだけの交換に“意味”はない。同様に、母親のファルスと息子のファルスの交換においても、性別は違えど、同じファルス（の欠如）同士を交換することに“意味”があるとは思えない。

## V

おそらくここに交換活動の真の謎と目的が潜んでいる。同じ意味であるがゆえに交換欲求が生じないなら、意味を多少なりとも変容させればよいのだ。たとえば同じ女性同士の場合、「母」と「娘」の差別化。そしてファルスの場合、「母」が持たないものとしてのファルス（「ペニス」）と、ファルスそのものとしての「息子」の差別化。どちら場合も（矢印の）起点は母（「a'」）だが、放たれた矢をどう扱うかは以後「a」（娘と息子）に委ねられる。ただ、娘と息子が同等の権利を保証されるかという点、先のラカンの引用が示すようにそうではなく、娘の行為を「主体的」と呼ぶにはいささか受動的（「対象」的）すぎる。

まず、行為主体である息子にとって自分の身体すべてをファルスとみなす母親の願望を息子は当然ながら受け入れることはできない。ファルスはあくまで自己の一部であり、たとえ“ない”リスク（去勢不安）があっても、ファルスを持ちたいという願望――というより、去勢不安からの逃避願望――が、それまでの母親からの視線に縛られていた自己の主体化と、その表裏一体としての他我の対象化を促進させる。

主体化と対象化は、同時に主語と目的語を通じた言語世界（「象徴界」）

への参入を意味する——

男性主体は、象徴的關係において、ファルスを自分に備わり自分に属すものとして、そして自分が合法的に行使できるものとして付与されているからこそ、母親対象を引き継いだ対象にとって欲望の対象所持者となります<sup>21</sup>。

母親のファルスからの切断は母親からの乳離れであると同時に、母親を本来あるべき父親のもとへ還すこと、つまりエディプスコンプレックスの崩壊でもあり、“近親相姦”の誘惑から解放されたいわばご褒美としての、性的対象としての（母以外の）「女性」一般がそこから誕生する。先の引用を続けると——

母親対象を引き継いだ対象とは再発見された対象であり、それはまた、正常なエディプス的位置関係における対象である原始的母に対する関係を刻印された対象、フロイトの所論の最初からの対象、すなわち女性です<sup>22</sup>。

ここまではなんとなく分かる。ただ、ここから思わぬ展開を遂げる——

女性が彼に、またファルスに依存しているからこそ——彼はそれ以後このファルスの支配者、代理人、保管者となるのですが——この位置がアナクリティックなものになるのです<sup>23</sup>。

「アナクリティック」とはフロイトの論文「ナルシズム入門」（ちなみにこれは誤訳で、正確には「ナルシズムの導入」<sup>24</sup>）に出てくるナルシズムの二つのタイプの一つで、邦訳では「委託型」「依存型」と訳される。我々の議論の文脈でいうと、能動的、主体的というより受動的、対象的であり、ラカンのもっと露骨な言葉でいうと、「愛する欲求ではなく愛される欲求」<sup>25</sup>のことであり、このいってみれば幼児的退行（「幼児的位置の単純な遺物」<sup>26</sup>）をフロイトは男性に特有なナルシズムとして「委託型ナル

シズム」と名付ける。

では、女性のほうはどうか？ 先に触れたように「女性は、ある時この弁証法に対象として入らなければならない」<sup>27</sup>のだが、男性が主体的な（上の？）立場にしながら「愛される欲求」を持つのなら、男女の愛を予定調和させるには、女性も同様に対象的な（下の？）位置から「愛する欲求」を持つべきことになるのか？ 答えはイエスだ。ただしそこには留保というか、逆説があって、「愛する欲求」の対象は男性ではなく、主体としての女性自身である。これがフロイトのいうもうひとつのナルシズムのタイプ、すなわち「ナルシズム型ナルシズム」であり、病理としての概念化に至った経緯を考慮すると<sup>28</sup>、用語がもつ奇妙な同語反復の響きもある意味、納得できるのである。

このように、もともと病理概念として「導入」されたナルシズムだが、フロイトはこれを女性全般、とくに「美女」の属性として拡大解釈する——

このような女性（＝「美女」）は、厳密な意味では自分だけを愛する。そしてこの自己愛の強度は、自分を愛してくれる男性の愛情の強度と一致する<sup>29</sup>。

正確なロジックを旨とするフロイトにしては珍しく、前半部分と後半部分のあいだに乖離があるように思える。そもそも愛が自分の中で自己完結しているのに、なぜあえて男という他者を必要とするのか？

矛盾を紐解く鍵は「厳密な意味では」という但し書き部分にある。厳密な意味でのナルシズムが一部の性倒錯者だけに限られた病理であるのとは裏腹に、広い意味でのナルシズムは、「自惚れ」や「自己陶醉」や「ジコチュウ」といったネガティブワードにも示されるように、誰にでも多かれ少なかれ当てはまる性格傾向である。美人についてもそれは同じで、狭義の「自分だけを愛する」女性はきわめて稀で、遠くからは「高嶺の花」に見えても、いざ近くで接してみれば普通に気さくで愛らしい女性がほとんどだ。それに美人自身、過度にナルシスティックに振る舞えば美人が台無しになることぐらい充分弁えていよう。ただ、こうした処世術的側面が

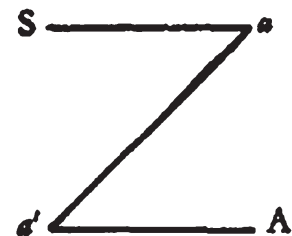
広義の意味に含まれるのは確かだとしても、それとは別の、常識や良識では測れない構造的理由も見えない形で存在しており、それがほかならぬファルスである。ファルスとは、美を完成させる最後のピースでありながら“ないもの”（「本質的欠如」）としてしか現れず、他者の手助けなしには“ない”ことの感触すら得ることのできないものである。では、この他者とは誰か？ 大文字の他者なのか、それとも小文字の他者（その場合、「a」と「a'」のどちら）なのか？ 結論からいうと、これらすべてだ。ただ、それぞれの役割が微妙に違う。順にみていこう。

まずは「a」。先の「私是一個の他者である」にもあるように、対象（目的語）としての「a」は小文字の他者である。なぜ自分のことを世界で一番知っているはずの当の「私」が他者なのかについては、これまで何度も確認してきた。主語としての「私」と目的語の「私」が一致してしまうと（「私はわたし」）、私への居直りという別の意味作用が生じてしまうからであり、居直り自体を本人のアイデンティティとするのは本人の意図するところではあるまい。自分に固執すればするほど自分と分離する現象を、かつて精神医学者たちは無自覚な侮蔑を込めて「ヒステリー」と呼んだが、ラカンのもっぱら記号学的知見から「言表行為」と「言表内容」のパラドックス（『クレタ人は嘘つきだ』とクレタ人が言った』等）を通じた考察を試みる。「私のどこが好き？」と訊かれ、「そういう君は自分のどこが好きなんだ？」と逆に訊き返され、仕方なく自分が思う自分の魅力（言表内容）を列挙し続けていくうちにふとよぎる理不尽と相手への鬱憤こそ（「なんで私がいちいちあなたの代わりに答えなければならないの！」）、まさにヒステリックな状態と言えるだろう。

一方、視点を変えて次のような見方もできる。追い詰められた末の「私」がまさに「言外に込められた怒り」によって「私のことを理解してくれないあなた（彼氏）」と意図せぬ形でつながるのだとしたら、このいわば“相互誤解”——その刻印が「a'」のアポストロフィ「'」である——こそ、いわば愛の証であり、秘訣と言えるのではないか（「愛とは自分のもっていないものを与えることである。……それを欲していない人に」）。

ただ、しかしそうなると二人の鏡像関係の立場が逆転してしまわないか？ 本来、愛を与える側が右下に向ける矢印によって示されるのだとし

たら、彼女はLシェーマの左下「a」に、彼氏は右上「a'」にいるはずだが、憤懣のあまりそれまでの受け身の立場から能動（攻撃？）の立場に移った彼女は、いまや右上「a'」から彼氏を見下ろす立場にいることになる。この明らかな矛盾にラカン自身、気づいていたのか、それともただの表記ミスなのか、Lシェーマには実はそれほど知られていないもう一つのバージョンが存在していて、そこでは「a」と「a'」の位置が逆転している<sup>30</sup>——



この「どちらの位置が正しいのか？」という問題は、しかしながら事の本質を鑑みれば実はさして重要な問題ではない。というのも、「私是一個の（＝ある“un”）他者である」という命題を突き詰めると、主語であろうと目的語であろうと他者であることに変わりはなく、どちらの立場を好むのが好むまいが、当人に決定権はなく、さらに決定権がないということは、「S」の立場にいることすら疑わしいことになる。そして、だからこそ「S」は同時に正体不明の「エス」（「それ」）として、亡霊のように背後から「S」の“主体性”を脅かし続けることになるのである。

さらに時間の観点から補足すると、ふたつが置き換え可能であるということは、置き換えられる“前”と“後”があるということでもあり、Lシェーマの公式バージョンにおいて「自我」とされる「a」は、もともとは「a'」（他我）だったわけである。このように「他我」が「自我」となり、「自我」が「他我」となるいわば“ないもの同士”の交換活動を根っこで支え、陰で操っているのが、「S」と「A」をつなぐ直線（その半分は点線）である。この線は「無意識」の壁により可視化されず、言語化、象徴化された残滓や裂け目を通じてのみ垣間見ることができる。このように、本来モノを視

覚的に指示する「それ」としての「S」は、以後「それ」というシニフィアン（元のモノが存在しない代名詞）に「なる」ことを通じて主体化される——

S——Aの線……の上で、主体と大文字の〈他者〉との関係が生じます。〈他者〉は単にそこにいる他者ではなく、文字通りパロールの場です。想像的に把握される他者の向こう側の〈他者〉、それ自体主体と想定されているこの〈他者〉は、パロールを行う関係の中ですでに構造化されて存在しています。この〈他者〉という主体の中でこそ、みなさんのパロールが構成されるのです<sup>31</sup>。

ここでラカンは主体が二つあることを示唆している（「S」としての主体、「A」としての主体）。これら二つの主体の関係にも鏡像関係と同様、一元化できない差異がみいだされる。ではその差異とは何か？ それは端的にいうと男女の差異であり、冒頭に記したエビグラフもそのことを示唆している「男女の調和というものが問題をはらんでいないとすれば、精神分析などありえないでしょう」<sup>32</sup>。ちなみにラカンはもっと過激な「性的関係は存在しない」という言葉も発しているが、そこまで言い切ってしまうと分析が始まらないので、我々としては断定の一手手前でなんとか踏み留まろう。

## VI

パロール<sup>33</sup>の導入は、同時にひととひととの関係をそれぞれに固有の意味ではなく、価値によってとりもつ市場としてのラングの導入でもある。ラングとパロールは、度々用いてきたニワトリと卵の関係のようにも見えるが、そもそも市場がなければ「a」と「a'」の交換活動はありえないという“構造的時間”の観点から言えば、ラングが断じて先にくる。統語論的には、文の前半部分「私とは…？」という問い（値付け）を設定し、価格決定は市場に委ねられる。その際、等価とされる対象「a'」がなぜ同じ値段であるのかという問いには当事者を含めて誰も答えられない。それで

も交換が成立するのは、対象が交換可能な価格だからであるが、それでは何の説明にもならない。が、逆にこの「何の説明にならない」が故に交換欲求が生じたとしたのだとしたら、この説明不可能性、つまり“意味”のなさ、あるいは意味の対義語としての価値そのものに動機を見出すべきだろう。

中身（意味）を持たない価値、それがイメージである。我々はイメージに魅せられるか魅せられないかの二択しか選ぶ権利を与えられない。値のつかないイメージは市場から排除される。その際、個別に排除を執行するのは「A」の代理人としての「S」である。とはいえ、一度撤退しても、戦略を変え新たな価格設定で臨めば、交渉成立の余地はある。排除の過程を間近で見てきた「S」には、来るべき次の取引によりよい戦略を練る経験値が担保される。こうして、すべての潜在的に交換可能なものがイメージとして陽の目を見ることができるとすれば、それは同時にすべての「a'」が「a」鏡像（ロールモデル）として玉ねぎの皮となりえることを示唆する。「私のどこが好き？」はかくして永遠に繰り返される。問いの放棄は市場からの撤退、もしくは市場自体の崩壊のどちらかだろうが、市場の崩壊がどういうものかについては、Lシェーマは残念ながら何も教えてくれない。

## 註

1. 本稿は、「対象としての女性、対象の欠如としてのファルス——失われた「愛の極限」を求めた手がかかりとしてのラカンの「シェーマL」活用術」（『常盤台人間文化論叢』第3巻第1号（2017年3月）横浜国立大学都市イノベーション研究院）を原型を留めないほど大幅に加筆修正したものである。
2. ジャック・ラカン『セミナー対象関係』上、ジャック＝アラン・ミレール編、小出浩之、鈴木國文、菅原誠一訳、岩波書店、2006年、p24。
3. 長文の典拠はDarian Leader, *Why Do Women Write More Letters Than They Post?* (Faber and Faber, 1997)。設問は正確には本文中にある“the best reply might be (1) 'Big'”について、「下線部（1）が最も適した受け答えであること」の理由を、100字以内の日本語で説明しなさい」というもの（平成24年度横浜国立大学教育人間科学部・人間文化課程、総合問題2）。
4. 「本能とその運命」（『フロイト著作集』6、小此木啓吾訳、人文書院、1970年）を参照。

5. ラカン『セミネール無意識の形成物』上、ジャック＝アラン・ミレール編、佐々木孝次、原和之、川崎惣一訳、岩波書店、2005年、pp115～116。
6. スラヴォイ・ジジエク『身体なき器官』、長原豊訳、河出書房新社、2004年。もともとはジル・ドゥルーズ＋フェリックス・ガタリが『アンチ・オイディプス』（市倉宏祐訳、河出書房新社、1986年）の中で劇作家A・アルトールから借用した言葉。
7. そういえば、以前流行った語学スクールのCMのキャッチコピーに「mother、Mをとったら、other、他人です」というのがあったが、我々の文脈だと小文字のotherではなく、大文字のOtherとなる。
8. Fredric Jameson, “The Vanishing Mediator; or, Max Weber as Storyteller”, *The Ideologies of Theory: Essays Volume 2: Syntax of History*, 1988, University of Minnesota Press.
9. ラカン『セミネールフロイト理論と精神分析技法における自我』上、ジャック＝アラン・ミレール編、小出浩之、鈴木國文、小川豊昭、南淳三訳、岩波書店、1998年、p10。
10. ジジエク『ラカンはこう読め!』、鈴木晶訳、紀伊国屋書店、2008年、p16。
11. 同、p82。
12. 『セミネール対象関係』上、p118。
13. 「文化への不満」、『フロイト著作集』3、浜川祥枝訳、人文書院、1969年。
14. 「対象とは、不安という背景を覆い隠し、粉飾するための道具であり……」、『セミネール対象関係』上、p17。
15. ファルスが元にあるからこそ、能動・受動の区分以前に次のような見解が成り立つ。「もしも『男性的および女性的』という概念にいっそうはっきりした内容をあたえることができるのであれば、リビドーは男性に現われようと女性に現われようと、いつでもきままって男性的な本性をもつ……」、『性欲論三篇』、懸田克躬、吉村博次訳、『フロイト著作集』5、p75。
16. 『セミネール対象関係』上、p159。
17. 同、p59。
18. 同、p86。
19. 同、p37。
20. 同、p57。
21. 同、p102。
22. 同、p102。
23. 同、p102。
24. 『フロイト著作集』5、懸田克躬、吉村博次訳では「ナルシズム入門」。『フロイト全集』17（岩波書店、2006年）の立木康介訳では「ナルシズムの導入に向けて」。
25. 『セミネール対象関係』上、p101。
26. 同、p102。
27. 同、p118。
28. 「ナルシズムという述語は臨床上の記述に由来するものであって、ある人間が自分の肉体をあたかも対象のように取り扱う、つまり性的な快感をいだいてこれを眺め、さすり、愛撫して、ついには完全な満足に達するにいたる行為を表わすために、P・ネッケが一八九九年に選んだものである」、『ナルシズム入門』、p109。
29. 「ナルシズム入門」、フロイト『エロス論集』、中山元編訳、ちくま学芸文庫、1997年、p255。
30. フレドリック、ジェイムソン「ラカンにおける想像界と象徴界」、『のちに生まれる者へ ポストモダニズム批判への途1971-1986』、鈴木聡、篠崎実、後藤和彦訳、紀伊国屋書店、1993年、p193。
31. 『セミネール対象関係』上、pp97-98。
32. 『セミネール対象関係』上、p24。
33. 「言語学者ソシュールの用語。ある社会の共有物としてのラング（言語）が、ある個人によって実際にある時、ある場所で使用されたもの」大辞林第三版。

（都市イノベーション研究院・教授）

## Love Misses:

### A Method of Using Lacan's "Schema L" for Searching for a Clue to the Lost "Limits of Love"

Tomonori Kiyota

What is the use of schematizing the human mind which is unschematizable by definition? This paradox is inherent theoretically and practically in Jacques Lacan's notorious use of schema (or, re-application of Freud's psychic topology)—in the sense of being more difficult and enigmatic than not using it—so much so that the reader feels as if he is schematizing it to show the very impossibility of schematization.

In this paper I choose Lacan's one of earlier schemas—widely known as "Schema L"—and the reason for this choice is because it is allegedly easier to comprehend than his other (later) ones, but such impression is false and misleading, insofar as "the unconscious," definitely the most important factor of Schema L, "bars" us from comprehending it as it is visually indicated on the schema.

Then, who can see the unconscious? According to the schema, it is "the Other" (Autre), which is the starting point of an unknown message which is sent to "the Subject" (or Es) "unconsciously." Thus, the Other can be known as the unknown, and so can the subject, who therefore needs the small "autres" ("a" and "a'") to fill out the subject's empty spot and to complete the sentence (which is the most basic human action). Yet these "others" are incomprehensible as well and impossible to appropriate, and this is why, to provide pain relief for a permanent identity crisis, images (which are good and pleasant by nature) intervene between "a" and "a'" in order to secure the subject.

Yet an image is just an image (or plural images because they are countless just as the Other is boundless), and so the subject is obliged to shift its focus onto the higher level of its human integrity, namely the language, which, however, only leads back to the starting point of human construction. Thus there the subject was, there would be the Other. What lesson or conclusion do we draw from this? Nothing, but we cannot stay on nothing and help but move on. Nor can L-Schema stop moving on, since it lives a life of its own from which we humans are all alienated or "castrated" in one way or another.